sp_[illegible]

[illegible]

Image

医療関係者用

Hematologists × 地域医療

Special issue

専門領域というアイデンティティを確立し、ライフイベントでキャリアを諦めることなく活躍を

三重大学医学部 地域血液内科講座 准教授
杉本 由香 先生

ノバルティス ファーマ株式会社

Image

専門領域というアイデンティティを確立し、ライフイベントでキャリアを諦めることなく活躍を

三重大学医学部 地域血液内科講座 准教授 杉本 由香 先生

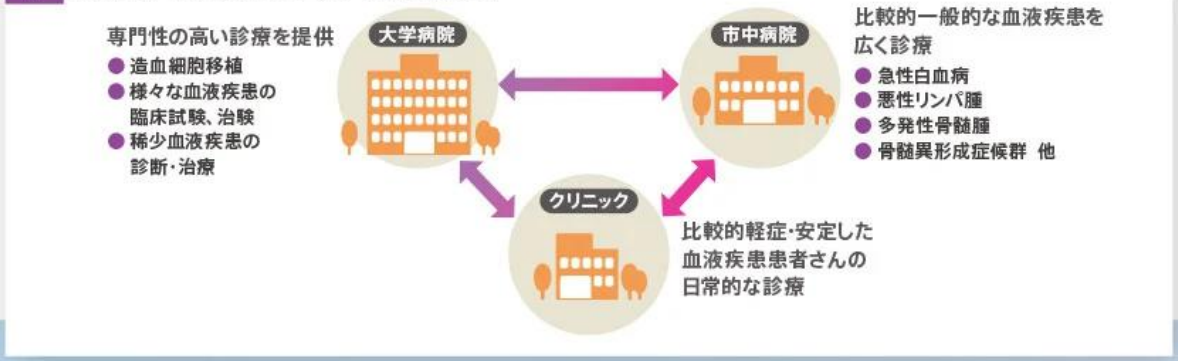
大学病院、市中病院両方の立場を経験して感じた、それぞれの役割

現在、外来診療は骨髄増殖性腫瘍(MPN)外来を三重大学で担当し、一方で入院診療は所属している市中病院で行っています。

三重大学血液内科の特徴の1つでもあるMPN外来では、東海地区の先生方からの紹介を受けて診療しています。MPNの可能性が高い患者さん、より専門的な検査・治療方針を求める患者さんが多くいらっしゃいます。当科の入院病床は20床強ありますが、造血細胞移植や治験など大学病院でしかできない診療を受ける患者さんが大多数です。三重大学血液内科では複数担当医制をとっており、1人の患者さんを2～3人の医師で担当し、お互いにカバーし合います。育児中の先生に急用ができたときなどでも柔軟な対応ができ、1人主治医制より融通が利くと感じています。

一方の市中病院では、検査や治療のフットワークが軽いので、大学病院でなければできない治療でない場合、特にご高齢でフレイルの患者さんに関しては、市中病院の方が患者さんにとってもメリットが大きいと両方の立場を経験して思います。また、患者さんの負担を考え、市中病院からさらにクリニックにお願いすることもあります(図)。

図 大学病院・市中病院・クリニックそれぞれの役割



血液内科専門医だからこそできる、詳細な紹介状で一般内科でも連携先を開拓

三重県内の血液疾患診療ネットワークは、いずれも三重大学の医局関連施設ですので顔見知りのような関係性が築けており、連携もスムーズです。とはいえ、患者さんの地域・ご希望から、血液内科以外のクリニックの先生に診療をお願いする

Image

場合もあります。

私が連携時に心がけているのは、連携先への紹介状やいただいた紹介状へのお返事を丁寧に記載することです。診断や治療選択の背景、患者さんのご希望、再紹介の基準、治療薬の用法用量などの具体例も交えて詳細かつ具体的に、また血液疾患に興味を持っていただけるように書いています(表)。血液内科がご専門でなくても診療を受けてくださる先生がいらっしゃる場合は、その先生に近隣地域の患者さんをお願いすることもあります。

表　紹介状の記載内容

- 診断や治療選択の背景
- 患者さんのご希望
- 再紹介をするべき基準
- 治療薬の用法・用量
- その他処方に関する情報

海外で見た、自分らしくいるための環境づくりを

私は医師である夫の留学に付き添う形で渡米しました。最初は「人生の夏休み」という思いでしたが、最終的に米国Cleveland Clinic Taussig Cancer Centerのフェローとして過ごしました。当センターでの研究[1,2]が、現在のMPN研究のきっかけになりました。

米国において、仕事は人生の一部です。人生の全てを医学・医療に費やすことはありません。同僚ともワークシェアで助け合いますし、土日は原則休みで子育ての時間も充実しました。

また、この頃に医師になって止めていたピアノを再び始めました。趣味などで人生をより豊かにすることは仕事を長続きさせる秘訣だと学びました。

海外経験から女性医師の働き方を考えると、まず短時間でも働きやすい環境づくりが重要です。例えば、8時間のフルタイム勤務を前提とした採用基準では、子育て中の女性医師は「やってみよう」という気持ちすら起こりません。一方、ワークシェアでの5～6時間であればチャレンジしようと思う医師もいるでしょう。チャレンジできる場、最初の入り口は広く設けることが重要です。もちろん、子育ての手伝いや当直免除など、家族や周囲の理解とサポートがあるとよりよいでしょう。

また、制度の充実も重要ですが、制度があるのに活用できないこともあると聞きます。育児休業を例に挙げると、一定の要件*を満たさないと取得ができません[3]。医師は転属が頻繁にありますから、実態に即した取得しやすい制度になることを期待します。

Image

周囲から必要とされるアイデンティティを持つことが大切

女性医師の先生へは、細々でもよいので医師を続けること、また、医師として働くモチベーションを持続させるために周囲からも必要とされるアイデンティティを持つことの重要性を伝えたいです。私の場合はMPNにおける遺伝子変異検索を中心とした研究と診療がそれにあたります。

MPN診療は外来診療がメインとなります。診断から治療方針の決定・説明、治療導入を外来で行い、長期にわたりその時々の患者さんの思いに寄り添いながら治療継続を支え、信頼関係を維持する必要があります。様々なライフイベントに直面している、または経験してきた女性医師の視点や特性が活かせる疾患領域の1つなのではないかと感じています。

仕事・家事など、あらゆることに100%を追い求めないようにしましょう。時には80～90%しかできなくてもOKと割り切り、心に余裕をもってプライベートも充実させることが、医師として長く働いていくうえでも重要だと考えます。

＊申出時点において、同一の事業主に引き続き雇用された期間が1年以上であり、かつ、子が1歳6か月になる日の前日までに労働契約(更新される場合には、更新後の契約)の期間が満了することが明らかでないこと。なお、労使協定の締結により、育児休業が取得できない場合がある。

1) Sugimoto Y, et al.:J Hematol Oncol. 5:4, 2012
2) Sugimoto Y, et al.:Br J Haematol. 150(1):83-87, 2010
3) 日本医師会女性医師支援センター:DOCTOR-ASE with 医師の多様な働き方を支えるハンドブック 2021年版, pp.14-15, 2021

Comment

女性の血液内科医が活躍するために

日本血液学会 女性活躍委員会 委員長
三谷 絹子 先生

血液内科は非常に女性向きの診療科であると思います。現在私達の手の中にある多様な選択肢(化学療法、移植医療、分子標的療法、免疫療法等)の中から、じっくり考えて(決して男性はじっくり考えるのが苦手であると申しているのではございません)最も適切な治療法を選択し、悪性疾患の患者さんを治癒させることが可能だからです。また、研究分野でも、女性医師がその粘り強さと独創的な着想で、多くの業績をあげられています。そうは言っても、女性には特有のライフイベントがあり、そのキャリアを継続することは必ずしも容易ではないこともあります。本人のやる気はもちろん、家族のサポート、職場での理解等様々なレベルでの支援が必要です。

日本血液学会は年々会員数を増やしていますが、女性会員の比率が増加傾向にあります。2021年には、24.6%となりました。女性活躍委員会では、こうして増えてきた若手の女性医師のキャリアを支援するために様々な活動に取り組んでいます。2015年より女性評議員を増やすことを目標に、女性評議員特別推薦枠を設けています。その結果、女性評議員の比率は、2012年の5.8%から2021年は12.2%と増加しました。これは日本の内科系のサブスペシャリティ学会の中でも誇れる数字であると思います。そして、女性評議員の先生方、あるいは、そうではない女性の先生方も、学術集会総会で演者・座長として活躍していただけるよう、理事長・会長が先頭に立って支援をして下さっています。また、学術集会の際には、2016年より女性医師のキャリアを考えるシンポジウムを企画しています。様々な領域でご活躍の先生にご登壇をいただき、ご自身の経験を含めてお話いただき、若い女性医師にエールを送っていただいています。

血液内科の診療は必ずしも楽ではありませんし、キャリアを継続するためには少しばかり持続する意志力と、そして時には発想の転換が求められるかもしれません。でもきっと大丈夫です。何を選択されたとしても、学会には、ロールモデルとなる先生がたくさんいらっしゃるのですから。

Image

CROSS TALK

働き方改革は経営課題
～2024年に向けて血液内科に必要なこと～

三重大学大学院医学系研究科
血液・腫瘍内科学 教授
俵　功 先生

×

ハイズ株式会社 代表 /
慶應義塾大学 特任教授
裵　英洙 先生

タイムリミットは2024年

裵　本日は「医師の働き方改革」についてお話させていただきたいと思います。はじめに三重大学の取り組みについて教えていただけますか?

俵　三重大学は県内で唯一医学部がある大学で、県内の15病院に当科出身の血液専門医が勤務しています。都市部には移植など専門的な治療に特化した病院もありますが、三重の病院では原則として、血液疾患全般を診ています。慢性期の良性血液疾患患者さんは、血液内科出身で開業された先生に診療をお願いすることもありますが、開業医の数は都市部と比べて限られています。血液内科の患者数は増加しており、各病院では複数担当医制/当番制の併用などに取り組んでいます。これにより、長時間労働を減らして休暇を取得しやすくし、万が一体調を崩してもフォローができるような体制を目指しています。

裵　「医師の働き方改革」は「地域医療構想(地域病院の機能特化と集約化の推進)」と「医師偏在対策」を共に進めていく三位一体改革の1つです(図)[1]。「働き方改革」を単独で進めるのではなく、県下どの血液内科でも血液疾患全般を診ている三重の体制に合わせて3つの改革を進めることが重要ですね。

また、「医師の働き方改革」は2024年4月1日からスタートすることが決まっています。つまり、それまでの間に準備を完了させなければならないのですが、三重大学ではいち早く取り組まれていますね。2024年4月以降は医療ニーズや専門性、地域医療提供体制の点から国内約8,500の全病院が(A)水準、(B)水準、(C)水準のいずれかに分類され時間外労働に基準が設けられます。(A)水準の時間外労働上限が960時間であるのに対し、(B)(C)水準は1860時間と倍近くで、血液内科のような高度医療を提供しなくてはならない大学病院などは(C)水準に当てはまると考えられますので、慎重かつ大胆な改革が必要になると思います。

図　働き方改革の3つのポイント

業務の分担は働く医師だけではなく医局の将来にもメリット

俵　現在三重では、診療拠点の集約化を進めており、患者数の多い施設へは医師を多めに派遣しています。例えば松阪市には3つの総合病院がありますが、血液内科入院診療施設は2病院に絞りました。また自家移植は県内6病院で実施していますが、同種移植は県内2か所の病院に集約しております。

裵　地域医療構想を着実に進められている印象を受けました。こうした改革では病院ごとの得意分野や特色・業務が"見える化"されている点も重要です。「こういう業務のために忙しい」という"見える化"が進まないと、医療機関同士のタスクシェアもうまくできないからです。

Image

三重大学大学院医学系研究科
血液・腫瘍内科学 教授
俵　功 先生

ハイズ株式会社 代表 /
慶應義塾大学 特任教授
裵　英洙 先生

俵　松阪中央病院は患者数が多い施設の1つですが、チーム制を取り入れタスクシェアリングをしています。ベテランの先生お二人が外来患者さんを診察している間に若手の先生が病棟を回ります。その中にはパートタイムで勤務する女性医師が数名おり、業務をシェアしています。チーム内の先生同士が定期的にカンファレンスなどで情報共有を密にしているため任せておけるという状況を作られているのが成功の秘訣だと思います。

裵　魅力的なモデルですね。チーム制を導入すると、休みやすくなるという利点だけではなく、他の先生がどのように考え診療しているのかを"盗む"つまり技術向上の利点もあります。働き方を良好にするコツとして❶メンバー(特に上長)の理解、❷複数担当医制やフレックスタイム制、パートタイム制といった働き方の多様化、❸「1年頑張ろう」などと時間軸を提示することがポイントになります。

俵　❶に関連して、私としてはできる限り皆さんと話をするようにしています。例えば「海外で勉強したい」などといった、一人ひとりの希望をかなえてあげたいですね。

裵　医局員の確保・離職防止に関してのコンサルティングを行う際は、敷居の低い相談体制の構築、杉本先生のような参考となるロールモデルの構築、そして複数の働き方の選択肢を提示することの3つをお勧めしています。それらは医局の"売り"として将来の入局者へのアピールにもなると思います。

チームのモチベーションが改革を推進する

俵　三重大学では、それぞれの医局員の学びたいという背中を後押しする風土があります。希望すべてを叶えることは難しいので我慢をしてもらうこともありますが、一人ひとりのやりたい方向性が違っても、最終的には実現できている、それが多様性にもつながっていると同時に、モチベーションを上げているのではないかと思います。

裵　労働生産性の大きなエンジンとなるのはモチベーションです。それぞれが目標に向かい活躍できることで、自己実現の動機を満たして労働生産性も向上します。また、多様性が風土として定着することは、経営的にもアドバンテージになります。何か危機・リスクに直面したときに、多角的にアイディアを出し合い、支えあうことができるようになります。

新たな地域医療体制の"うねり"を三重県から

俵　三重県下の拠点病院で高度医療を提供しながら、特に若い医師の希望を叶えるような医局運営を目指していきたいと考えています。また、血液内科の魅力を発信して、血液内科医を目指す若手を増やしていきたいですね。

裵　働き方改革、地域病院の機能特化と集約化は地域医療の課題であると同時に各病院の経営課題でもありますが、それを実践できている診療科はまだ少ないのが現状です。俵先生のお話を伺い、三重県で新たな地域医療体制の"うねり"が生まれていることを感じました。

1) 裵英洙監修:医師の働き方改革大全 現場と経営の変革に効く「完全マニュアル」. 日経BP, 東京, pp.10-13, 2019

ONC00013JG0001
2021年12月作成

□□□□□

Source URL:
https://www.pro.novartis.com/jp-ja/support/lecture/hem_mailservice/hematologists_sp